



Title	イリノイ大学モートンソンセンターFall2007 Associates Program参加報告
Author(s)	大塚, 志乃
Citation	大学図書館研究. 2009, 85, p. 91-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イリノイ大学モートンソンセンター Fall 2007 Associates Program 参加報告

大塚 志乃

抄録：2007年に参加したモートンソンセンターの研修プログラムの内容を報告し、アメリカの大学図書館活動の一端を紹介した。最新動向を全体的に把握できるよう用意された講義と図書館訪問をはじめとして、現地の文化にも触れられるよう多様なアクティビティが用意されたプログラムであった。また、多くの国からの参加者と図書館というつながりを通じて交流を深めることができた。アメリカのライブラリアンの自信と熱意を感じ、利用者へのサービス向上につながる会話のある職場としての図書館でありたいと考察した。

キーワード：国立大学図書館協会、海外派遣事業、イリノイ大学、モートンソンセンター、国際図書館プログラム

1. はじめに

平成19年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、2007年9月4日から11月2日までの約2か月間、アメリカのイリノイ大学モートンソンセンターのアソシエイト・プログラム（Fall 2007 Associates Program, Mortenson Center for International Library Programs, University of Illinois, 以下、Fall 2007 Associates Program）に参加した。同協会の海外派遣事業は平成18年度に始まり、今回で2回目であった。

プログラム参加者の顔ぶれは様々であり参加目的も異なっていたが、充実した内容の研修プログラムが組まれており、参加者の満足度は高かった。本稿では、研修プログラムの内容を紹介し、また、アメリカの図書館サービスの一端と14か国から集まった参加者との交流について報告する。

2. プログラムの概要

2.1 モートンソンセンターの活動

モートンソンセンターは、モートンソン夫妻の寄付により1991年に設立されたセンターである。国際的な教育・相互理解・平和の促進のために図書館員に研修プログラムを提供し、地理的な位置や技術へのアクセスに関わらない図書館と図書館員の国際的な結びつきを強めることを目的として活動している。場所はイリノイ大学学部学生用図書館（Undergraduate Library）内にあるが、組織としては独立している。イリノイ大学のメインキャンパスはアーバナとシャンペーンという2つの小さな町にまたがって広がっており、そのほぼ中央にメインライブラリーと学部学生用図書館がある（写真1）。

センターでは毎年秋に行う Associates Program 以外にも各国から短期・長期滞在の研修者を受け入

れており、また、アジア、アフリカなどの図書館とプロジェクトを立ち上げるなど、少数のスタッフで積極的に活動を行っている。

最近では、3年間にわたる“Thinking Outside of Borders”というプログラムが終了し、報告が出された¹⁾。これは、博物館・図書館サービス機構（Institute of Museum and Library Services）の資金提供のもとにイリノイ州立図書館との協力で行われたものである。Fall 2007 Associates Program にも“Thinking Outside of Borders”の一環としていくつかのプログラムが組み込まれていた。



写真1 イリノイ大学図書館メインライブラリー

2.2 Fall 2007 Associates Program

Associates Program はモートンソンセンターの代表的な非学位プログラムであり、現在までに累計で700名以上が参加している。約8週間の期間中、講義や図書館訪問などがセンターによってすべてアレンジされたグループ研修である。

2.3 参加者

北米以外の地域の図書館員や情報専門家が参加対象であり、2007年には14か国から17名が参加した。参加国は、日本（2名）、コロンビア（3名）、韓国、ベトナム、パキスタン、ウズベキスタン、ガーナ、ナイジェリア、ウガンダ、タンザニア、ブラジル、コスタリカ、エルサルバドル、メキシコ（各1名）であった。

参加対象が大学図書館に限定されていないため、毎年、参加者の所属機関の傾向が異なるが、2007年は大学図書館からの参加者が非常に多かった（大学図書館10名、公共図書館3名、学校図書館1名、専門図書館1名、議会図書館1名、教育職1名）。職種は教員、図書館長、レファレンス・ライブラリアン、貴重コレクション・ライブラリアン、音楽司書、IT技術者などであった。参加者の年代も20歳代4名（最年少は25歳）、30歳代4名、40歳代6名、50歳以上3名と幅広かった。

また、参加費用の負担者は、所属図書館や協会による負担、カーネギー財団やフルブライト奨学金による支援など参加者によって異なっており、全額自己負担という参加者も1名いた。

日本からの参加者2名はそれぞれ国立大学図書館協会および私立大学図書館協会からの派遣であった。

3. プログラムの内容

研修プログラムは例年と同様に以下のような構成であった。

- ・講義
- ・図書館訪問
- ・Host Visit
- ・学内外の会議への参加
- ・イリノイ大学ライブラリアンへの個別インタビュー

以下、それぞれについて概要を述べる。

3.1 講義

講義には、図書館経営シリーズなどの連続講義と実務や最新技術についてのライブラリアンによる講義・実習の2種類があった。多くの講義では参加者も積極的に質問や意見を述べる形式であり、時にその活発さに圧倒されるほどであった。以下に受講した講義と担当者を記す。

3.1.1 連続講義

- ・図書館経営シリーズ
 - 予算と会計、評価/Bob Burger氏
 - 人的資源管理、変革管理、指揮監督 (directing)

/Rae-Anne Montague氏

- ・プロジェクト・マネジメント/Barbara Ford氏（2回）
 - ・コミュニケーション技法、プレゼンテーション準備、ファンド・レイジング（資金調達）の戦略/Susan Schnuer氏
 - ・情報技術入門、図書館システムの概観、オープンソース・ソフトウェアの利点、ハードウェアおよびソフトウェアの更新、ベンダーとの関係、技術に関連した政策展開/Kristin Vogel氏
- #### 3.1.2 その他の講義、業務説明、実習
- ・大学図書館の役割/Paula Kaufman氏
 - ・イリノイ大学における目録/Atoma Batoma氏
 - ・イリノイ大学図書館の“How to”，マルチメディアとパワーポイントによるプレゼンテーションの進展，進んだWeb検索の技術とWebブラウザを基本にしたサービス/Sara Thompson氏
 - ・情報リテラシー/Susan Avery氏
 - ・本のツアー（受入から配架まで）/Lynn Wiley氏
 - ・図書館とリテラシー/Bob Wedgeworth氏
 - ・Web2.0とゲーム/David Ward氏
 - ・IDEALS²⁾/Sarah Shreeves氏
 - ・十代の生徒にインターネット倫理を教える/Frances Harris氏
 - ・コンソーシアムの役割とOCLC/Jan Ison氏, Joe Sciacca氏
 - ・デジタル・レファレンスサービス/Beth Woodard氏
 - ・資源共有とドキュメント・デリバリーの未来/Cherie Weible氏
 - ・アメリカの公共図書館，図書館建築と空間設計/Fred Schlipf氏
 - ・障害者サービス/Bryan McMurray氏, Mary Beth Allen氏, Susan Schnuer氏
 - ・デジタル・コレクションの管理/Betsy Kruger氏
 - ・都市図書館協議会 (Urban Libraries Council: ULC)/Martin Gomez氏, Beronda Pitchford氏
 - ・Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois (CARLI)/Kristine Hammerstrand氏
 - ・国際法と著作権/Janice Pilch氏
 - ・多様な人々へのサービス/Beth Sandore氏, Scott Walter氏
 - ・利用者中心のWebサイトのデザイン/Lynne Rudasill氏, JoAnn Jacoby氏
 - ・プロジェクト・グーテンベルグ³⁾の紹介/Michael Hart氏
 - ・無料または低コストの電子資源を見つける/Jo Kibbee氏

表1 図書館等訪問先リスト

	訪問先	大学図書館	公共図書館	学校図書館	専門図書館	関係団体
1	ACES, UIUC	○				
2	Main Library, UIUC	○				
3	Undergraduate Library, UIUC	○				
4	Asian Library, UIUC	○				
5	Library and Information Science Library, UIUC	○				
6	Chicago Tribune					○
7	Chicago Public Library		○			
8	American Libraries Association					○
9	Newberry Library		○			
10	Uni High School's Library, UIUC			○		
11	Lincoln Trail Library Systems					○
12	Urbana Free Library		○			
13	Oak Street Remote Storage Facility, UIUC	○				
14	Western Illinois University, the Leslie F. Malpass Library	○				
15	Illinois State Library		○			
16	Paxton Public Library		○			
17	Illinois Wesleyan University's Ames Library	○				
18	Residence hall library, UIUC	○				
19	Arthur Public Library		○			
20	LexisNexis					○
21	OCLC					○
22	The Ohio State University (OSU) Ackerman Library	○				
23	OSU Library Book Depository	○				
24	OhioLINK					○
25	Stout Reference Library of the Indianapolis Museum of Art				○	
26	Westerville Public Library		○			
27	Parkland College Library	○				

*掲載は訪問順, UIUCはイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の略

3.2 図書館訪問

大学図書館, 公共図書館, 学校図書館, および ALA, Chicago Tribune 社, OCLC などの関係団体を訪問した(表1)。

3.3 Host Visit (短期滞在研修)

参加者がイリノイ州内の図書館にそれぞれ2,3日間滞在しての研修が行われた。筆者はパキスタンからの参加者ととも州西部の Western Illinois University に派遣され, 図書館長の Phyllis C. Self 氏の自宅に宿泊した⁴⁾。アーバナ・シャンペーンから車で片道3時間の Macomb という小さな町にある学生数約13,000名の公立大学であった。1泊2日という

短期間ではあったが, 広大なキャンパスを持つイリノイ大学とはまた異なる雰囲気を楽しむことができた。

蔵書は博士課程を持たない大学ではトップ10に入り, 18名の Faculty 資格を持つライブラリアンと40名以上のスタッフがいるとのことであった。Western Illinois University のライブラリアンと, 図書館学の基礎クラスでの約20名の学生に対して, 所属図書館を紹介する短いプレゼンテーションを行った。2日目には大学の国際交流部門の長とのミーティングで大学の留学生の誘致について話を聞き, その後, “Workshop International and U.S. : Issues of Gender” というワークショップに参加し



写真2 セッション “Becoming a Library Advocate” でのグループ発表



写真3 ブックトラック競技

た。ワークショップでは、留学生が陥りやすい孤独（特に男子）と孤立（特に女子）について発表とディスカッションが行われた。

Host Visitの前日には、ホストのライブラリアンも参加して “Becoming a Library Advocate” と “DiSC Training”⁵⁾ というセッションが行われたが、これらは既述の “Thinking Outside of Borders” のプロジェクトによるものであった。“Becoming a Library Advocate” では、ワシントンD.C.の Advocacy Associates⁶⁾ からStephanie Vance氏を迎えて、図書館活動の役割や必要性をPRする取り組みである Advocacy⁷⁾ について学び、グループでディスカッションと発表を行った（写真2）。

3.4 学内外の会議への参加

3.4.1 2007年イリノイ州図書館年次大会

同年次大会は全米で3番目に大きな州レベルの図書館大会であり、2007年は州都スプリングフィールドで行われ、約2,400名が参加した。

3日間の期間中に、“Innovative Customer Service Practices in Libraries around the World” と名付けられた分科会で研修参加者が国別にプレゼンテーションを行った。持ち時間が各国5分という短いものであったが、このために講義でプレゼンテーション技法を学び、2度にわたってリハーサルをして準備を行った。日本からは2名参加のためプレゼンテーションの内容は2本立てとした。前半は筆者が所属する大阪大学附属図書館の生命科学分館も含まれる外国雑誌センター館の紹介を行い、後半は立教大学の伊藤秀弥氏が日本の図書館における専任職員の減少と非専任職員の増加の問題と改善策のアイデアについてまとめた。分科会後に興味深い内容だったとのコメントをいただいた。

前夜祭では、“Book Cart Drill Team - 2007

State Championship”があり、メーカー名が大きく書かれたブックトラックを使って3つの図書館のライブラリアン達が音楽に合わせてダンスし、優勝を競うというイベントも行われた（写真3）。

3.4.2 Symposium on the Future of ILS (Integrated Library System)

アーバナ・シャンペーンで行われた2日間の同シンポジウムに参加した。参加者の多くは州内の図書館員であったが、ウィスコンシン州やカンザス州など遠方からも参加があった。シンポジウムでは図書館システムの今後の方向性について、ライブラリアン、OCLC、ベンダーなど様々な立場の参加者による発表と議論が行われた。「知り合いを増やしてたくさん話しましょう」という予想以上にコミュニケーションを重視する姿勢と、朝食からディナー後のセッションまでの長時間にわたるタイトなスケジュールを経験してアメリカのライブラリアンのバイタリティに感じ入った。

3.4.3 Faculty Meeting

イリノイ大学ライブラリアンのFaculty Meetingに参加する機会があった。約60名のライブラリアンが参加し、新しいメンバーの紹介や取り組んでいる業務の報告と意見交換が行われた。

3.5 イリノイ大学ライブラリアンへの個別インタビュー

研修参加者はライブラリアンに個別インタビューを申し込むことができる。アジア図書館の野口契子氏を通じて情報リテラシーサービスのコーディネーターを務めるLisa Hinchliffe氏とコレクション部門のAssociate University Librarianを務めるTom Teper氏からお話を伺った。

Hinchliffe氏からは、コーディネーターは大学全体の情報リテラシー教育の年間計画を策定するとい

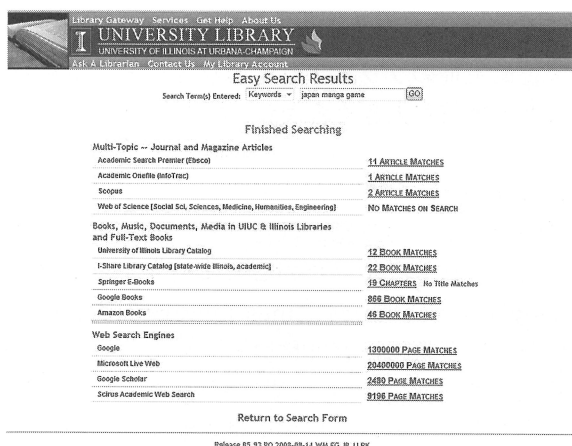


図1 検索結果例

う立場ではなく、大学内の図書館で各ライブラリアンがそれぞれ情報リテラシー教育を計画・実行しているとのお話であった。(大きな図書館では情報リテラシー教育の担当者があるが、アジア図書館など少人数の図書館では各人が選書から情報リテラシー教育まで専門分野について幅広くサービスを提供している。) Teper氏は2007年に現職に就いたばかりであったが、大学内の40以上の図書館の資料費の配分に携わっており、雑誌、プリントそれぞれの資料費の配分は大仕事であるとの印象を持った。

また、他の参加者2名と一緒にBryan McMurray氏からもお話を伺った。リハビリテーション教育センターの視聴覚教育スペシャリストのMcMurray氏は、自身も目が不自由であるが、インタビューでは特に視覚障害者が使用する機器や点字絵本をご紹介いただいた。

4. アメリカの図書館サービスの動向

8週間の滞在中に見聞したアメリカの大学図書館を中心とした図書館活動の一部について述べる。

4.1 Webの活用

4.1.1 図書館のWebサイト

イリノイ大学図書館を含め、アメリカの図書館のWebサイトは非常に充実している。イリノイ大学では、Web of Scienceなどのデータベース、OPACやイリノイ州内の図書館の総合目録I-Share、E-book、Googleなどのサーチエンジンを一度に統合検索するための検索ボックスが、図書館のWebサイトの中央に設けられている。図書館の蔵書かE-bookかネット上の情報か、といったリソースを気にすることなく利用者はキーワードを入力して探すことが可能で、検索結果は一画面にまとめて表示される(図1)。この統合検索を用いたWebサイトは

Fall 2007 Associates Programの期間中であった2007年9月に公開された。学生が調べものをするときに「まずGoogle」となっていることへの危機感があり、Sara Thompson氏はこの新しいWebサイトについて「use the easy search like Google」と紹介していた。訪問した他の大学図書館でもGoogleは何度も話題に上っており、Googleの存在感はかなり大きかった。

アメリカで図書館のWebサイトからよく利用されるのがインスタント・メッセージである。イリノイ大学でAsk a Librarianという質問・相談ツールとして紹介されているのが、順に、インスタント・メッセージ、電子メール、電話、カウンターの訪問、SMS Text(携帯メール)となっている。この中で学生が最も利用するのがインスタント・メッセージと呼ばれるチャット形式のツールである。イリノイ大学では、図書館学を学ぶ大学院生がパソコンの前に座って学生からのさまざまな質問にリアルタイムに答え、難しい質問にはレファレンス・ライブラリアンが対応するとのことであった。

4.1.2 バーチャル空間での広報

日本ではそれほど広がらなかったSecond Life⁸⁾だが、イリノイ大学を始めとするいくつかの図書館では広報ツールとして利用しようとしていた。イリノイ大学図書館では、Second Life内にバーチャルな図書館を建て、住民に利用してもらうよう仕組みを考えているとのことであった。説明を聞いたときは、バーチャル空間に図書館を設置してどれほどの効果があるのか疑問を感じていたが、Facebookや日本のmixiなどのSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の影響の大きさを考えると、メンバー限定のバーチャル空間でも利用者とのコミュニケーションや図書館広報の試行が可能だと考えるようになった。

4.2 コンソーシアムとOCLC

アメリカでは地域単位のコンソーシアムがほとんどで、特に、州立大学や私立大学といった設置母体の種類ごとのコンソーシアムはない。州ごとの独立性が強いからであるが、イリノイ州でもいくつかのコンソーシアムが存在する。

その一つ、Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois (CARLI)は3つのコンソーシアムが統合して2005年に発足したもので、州内の約140の機関が参加している。中心となっているのはイリノイ大学だが、I-Shareという総合目録の提供をはじめとして、電子リソースの購入やメンバー館のための研修などのサービスが28名もの

フルタイムのスタッフにより運営されている。I-Shareを利用して所属図書館にない資料を利用者自身がリクエストすることも可能である。訪問した小さな町の公共図書館のライブラリアンは「こんな小さな図書館で蔵書も恥ずかしいほど少ないけれど、I-Shareを通じて膨大な資料がすぐに利用できるため世界が広がって嬉しい」と語っていた。ただし、州ごとに経済状況が異なるため、図書館などの文化施策への予算配分は州によって全く異なると、訪問先のライブラリアンが述べていた。

また、アメリカでの目録やILLサービスの中心的存在はOCLCであるが、その存在感は想像以上であった。何より、研修参加者の関心が非常に高かった。5日間だけ、筆者ら11名がオハイオ州へ、中南米からの参加者6名がネブラスカ州へと2グループに分かれて研修を受けたが⁹⁾、ネブラスカ州組がOCLCに行けないことを残念がっていた。OCLCへの参加を検討しているという参加者が数人おり、世界各地でOCLCのサービスが認められていることが分かった。

4.3 E-reserve

訪問した大学図書館で一般的だったサービスの一つが、E-reserveである。コース・リザーブの資料を電子ファイルにしてサーバーに保存する方法だが、アカウントを持つ学生はどこからでもアクセスでき、1冊の図書を取り合ったり2時間という制限時間を気にしたりする必要がないため、イリノイ大学ではE-reserveの割合が大きいとのことであった。教員が提出する資料の著作権を確認してスキャナで電子ファイル化するというのが一連の作業である。イリノイ大学では学生がファイルを開いた最初のページに著作権に関する注意が表示されるようになっていた。

4.4 資金調達と寄付

アメリカの図書館では資金調達は重要な仕事であり、イリノイ大学の図書館長のPaula Kaufman氏も相当な時間を資金調達に割いていると述べていた。学内でのアピールはもちろんのこと、基金や会社からの補助金や個人からの寄付のために活動しているとのことであった。

図書館に限らず大学の建物にはよく寄贈者の名前が記されたプレートが貼られている。図書館でも部屋の入口や書架などあちこちに寄贈プレートを見かけた。

また、イベントを行うときに関係団体や会社から資金提供を受けることは一般的で、公共図書館の

ブック・モービルやシカゴの公園で行われていた公共図書館主催のブック・フェアなど、どこでも資金提供者の名前が大きく書かれていた。

4.5 コピー機

一つの大学でのみ見かけたコピー機だが、筆者が初めて見た機能を持つためここに紹介する。Illinois Wesleyan University's Ames Library内に設置されていたコピー機は、普通にコピーする以外に、読み込んだものを紙に出力せずに電子ファイル化してメールアドレス宛に送信する機能が付いていた。実際に試してみたところ、メール添付の形で届いていた。同行したモートンソンセンターのスタッフも見ることがないとのことであったためアメリカでも一般的かどうか不明である。紙に出力するとコピー代が必要だが、自分のアドレスにファイルとして送ると無料であった。著作権の関係がクリアされれば非常に画期的なコピーサービスになると思われる。

5. 研修プログラムの支援態勢

5.1 センターのスタッフ

センター長のBarbara Ford氏、センター副所長のSusan Schnuer氏のほかにスタッフ2名（うち1名は大学院生）と秘書1名の5人体制であった。

講義や図書館訪問のスケジュールや手配といった公の部分だけではなく、空港への送迎、アパートの手配と数日分の食料品や日用品の準備といった2か月間の生活に必要な細部にまでスタッフの配慮があった。「何かあればいつでもすぐに連絡するように」と、全スタッフの自宅と携帯電話の番号リストが配布されたことが印象的であった。

5.2 モートンソン・フレンド

Associates Programの特徴の一つとしてモートンソン・フレンドが挙げられる。ボランティアとして募集され、各参加者に一人のライブラリアンが付く。筆者のモートンソン・フレンドはアジア図書館の野口契子氏であり、食事や買い物、上述の個別インタビューのアレンジと同席など、多くのサポートを受けた。また、他の参加者のモートンソン・フレンドの自宅で交流する機会もあった。参加者が外国人だからこそのサポート態勢と思われるが、いつでも頼れるという安心感は非常に心強かった。

5.3 その他のサポート

センター長のFord氏などの自宅パーティに招かれ、モートンソン・フレンドを含むライブラリアンや関係者と交流する機会が3回設けられた。アメリ



写真4 副所長宅でのランチパーティー（2列目左から5人目がセンター長のFord氏、同4人目が副センター長のSchnuer氏）

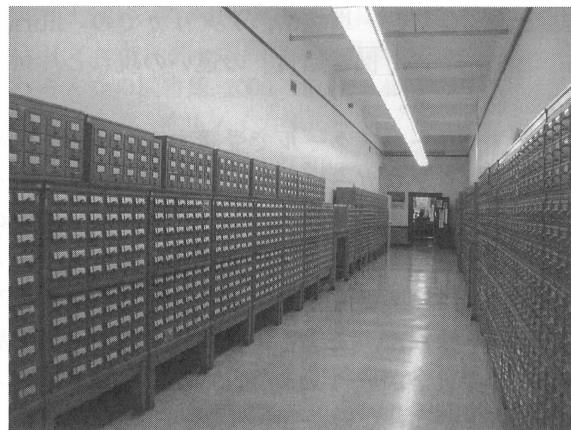


写真5 捨てられない目録カード

カの家を訪問する貴重な機会であった（写真4）。

また、Amish村ツアーや果樹園、トウモロコシ農場、カボチャ畑ツアーなど現地の文化に触れられるよう配慮がなされた。

外国からの参加ということで、大学の国際交流部門の担当者とのミーティングも設けられた。参加者からの質問や意見は、自国からの留学の可能性、特に奨学金や受け入れ態勢に関することが多かった。

6. 他の参加者との交流

自分の設定テーマに沿って研修する形式ではなく、センターによって2か月間のプログラム内容が組まれていることがAssociate Programの最大の特徴であるが、それとともに特徴の一つと言えるのが他の参加者との交流である。

特に2007年はセンター副所長のSchnuer氏が「Ambassador（大使）」とグループ名を付けたほどに、参加者の国の数が14か国と多かった。1年間の長期滞在予定の1名を除いた16名は、キャンパスはずれのオーチャードダウンという地域にある、大学構成員のための家族向けアパート群の一室に2名ずつ滞在し、文字通り「寝食を共にする」2か月を送った。食事や生活習慣、文化、宗教、政治など各参加者の持つ背景の相違に戸惑うことも多かったが、「図書館」というつながり和其他の参加者に対する敬意により交流を深め、互いの国と図書館に対する関心を高めることができた。大学院を出ている人や授業を受け持っている人もいて、いかに他国の図書館や司書の事情を知らないか思い知らされた。

図書館だけではなく、政治経済、国際平和についても関心が高い参加者が多く、訪問先での鋭い指摘と議論に圧倒されたこともしばしばあった。

これら参加者の多くとは研修終了後も連絡を取り

合い、互いの図書館の活動について情報交換を行っている¹⁰⁾。今後も欧米だけでなく各国の図書館の動向に関心を持ち続けたい。

7. さいごに

2か月という短いようで長い研修中に感じたのは「アメリカの図書館は先進的で素晴らしい」という礼賛だけではなかった。講義もすべてが目新しくなかったわけではない。実際、すでに知っていることもあった。書庫の狭隘化や学生のGoogle第一主義への危機感、予算獲得や人員削減といった大きなことから、遡及入力完了しても目録カードが捨てられないライブラリアンがいる（写真5）といった小さなことまで、日本と変わらない懸案事項が数多く存在する。

また、Faculty資格を持てば「定年」はないが、一方で、人的資源管理の講義で与えられたディスカッションのテーマに「長年、ライブラリアンとして働いてきたAさんは最近の技術の変化にうまく対応できていないようだ。そのため他のライブラリアンとの信頼関係が崩れてしまっている。どのように対応したら良いか」というものがあり、そういう事例が実は少なからずあるのではないかとも思われた。

しかし、毎日のように感じる類似と相違の交錯の中で、頻繁に感じた違いはライブラリアンの「自信と熱意」であった。「この自信と熱意はどこから来るのか」という素朴な疑問が常に頭の中にあり、翻って日本の状況を考えると「自信と熱意」を持つ（かつ、表面上に見せている）図書館員はアメリカに比べると割合は低いのではないかと思われた。

それはもちろん、文化、歴史、政治といった、国や国民の置かれている背景の相違によるものと考え

ることができるし、単純に、アメリカでの“librarian”と日本での「図書館員」の違いの現れと片付けることもできる。

ライブラリー・スクールで受講するコースを決めるときに「カタログラーになりたいからこれとこれを取って…」と決めて勉強するなど、図書館の中でのポジションを見据えながらライブラリー・スクールに通い、同時に図書館で働いてキャリアを積んで卒業するアメリカと、大学の司書課程での少ない必要単位だけで資格が取得できる日本とでは違いが出るのは仕方ないことなのかもしれない。

ただ、「仕方ない」で済まらずに、アメリカの図書館サービスで秀でていると思われることを取捨選択し（例えば、E-reserveはアメリカの大学図書館で普及しているが、指定図書制度のない筆者の所属図書館では必要ないと言える）、必要なサービスなら日本ではどのように実現可能かを考えていくことのできる図書館（という職場）でありたいと思った。訪問した図書館はどこも好意的で、かつ、「いろいろ見聞きして欲しい。そしてディスカッションして、私たちも何かアイデアをもらいたい」という姿勢で迎えられた。日常業務に追われて目の前のことをこなすだけで精一杯な職員が多い状況かもしれないが、日本の図書館でも、まずは気軽に話ができて、そこから何かを始められる雰囲気が必要だと改めて考える。今後のテーマの一つである。

最後に研修を総括すると、Associates Programのように準備された研修プログラムは、自らが設定したテーマに関して研究したり滞在先の図書館の1スタッフとして仕事に携わったりする研修とは大きく異なる。どの形の研修にも多くの長所があると思われるが、Associates Programは、多くの教員やライブラリアンからシャワーを浴びるようにさまざまなテーマの講義を受けられる点、州内外の20以上もの図書館を（自分でアポイントを取るというプロセスを経ずに）訪問できる点、二度とこのような機会はないと思うほど濃密に多国の図書館員と8週間もの間交流できる点が秀逸と思われる。

謝辞

国立大学図書館協会と大阪大学附属図書館には報告が遅れたことをお詫びするとともに、海外研修の機会をいただいたことに感謝する。また、研修中にお世話になったBarbara Ford氏、Susan Schnuer氏ほかモーテンソンセンターのスタッフ、アジア図書館の野口契子氏をはじめとする関係者と、数年分の喜怒哀楽を共にした16名の研修仲間にも心から感謝する。

注記・引用文献

- 1) Mortenson Center. “Thinking Outside the Borders.” (online), <http://www.library.uiuc.edu/mortenson/book/>, (accessed 2009-02-09).
- 2) IDEALSはDSpaceを使ったイリノイ大学の機関リポジトリである。“IDEALS”. (online), <https://www.ideals.uiuc.edu/>, (accessed 2009-02-09)
- 3) アメリカで著作権が切れた著作物の全文をテキスト化してインターネット上で公開するプロジェクトで、Hart氏が1971年に創始した。“Project Gutenberg”. (online), <http://www.gutenberg.org>, (accessed 2009-02-09)
- 4) 同氏のブログに、筆者らのHost VisitについてMumtaz Memon氏（パキスタンからの参加者）の詩とともに紹介されている。“Dean Self’s Blog”. 2007 International Librarians. (online), <http://www.wiu.edu/library/dean/blog/index.php?paged=15>, (accessed 2009-02-09)
- 5) DiSCはDominance, Influence, Steadiness, and Conscientiousnessの略で、自分の行動傾向を分析するためのツール。設問に回答することにより、これら4つの型（主導、感化、安定、慎重）の強弱から自分の行動傾向を知り、コミュニケーション能力を向上させることを目的としている。
- 6) “Advocacy Associates”. (online), <http://www.advocacyassociates.com/>, (accessed 2009-03-07).
- 7) 福田都代氏によると、「図書館アドヴォカシーとは図書館と図書館員の存在意義を擁護し、図書館が現在直面する状況、すなわち、図書館で何がおきているか、充実したサービスを継続するために何が必要についてのメッセージを様々な手段を駆使して訴え、可能な限り多くの賛同者を得て、図書館への行財政支援につなげる活動である」と定義される。福田都代. 米国における図書館アドヴォカシーの展開. カレントアウェアネス. 2007, 294, p.20-23, <http://current.ndl.go.jp/cal646>, (参照2009-03-07).
- 8) インターネット上の3D仮想世界。“Second Life”. (オンライン), <http://jp.secondlife.com/>, (参照2009-03-07).
- 9) ネブラスカ州へは既述の“Thinking Outside the Borders”の一環としてライブラリアンとの交流のために派遣された。オハイオとネブラスカの訪問についてはモーテンソンセンターでメンバーが決められた。Nebraska Library Commission. “Thinking Outside the Borders wiki”. (online), <http://thinkout.pbwiki.com/>, (accessed 2009-02-09).
- 10) Facebookにはモーテンソンセンターのグループがあり、200名以上の関係者が登録している。

参考文献

- 1) 鷹尾道代. アメリカにおける大学図書館員の専門性について：イリノイ大学モートンソン・センター国際図書館プログラムに参加して. 大学図書館研究. 2004, no.71, p.17-32.
- 2) 梅澤貴典. アメリカの大学図書館運営：モートンソン・センター国際図書館プログラム参加報告. 大学図書館研究. 2005, no.74, p.40-54.
- 3) 峯環. アメリカの大学図書館における利用者サービスに学ぶ：イリノイ大学モートンソン・センター国際図書館プログラムに参加して. 大学図書館研究. 2006, no.78, p.40-52.
- 4) 井上靖代. アメリカの図書館は、いま。(2) モンテソン・センター国際図書館員研修プログラム (1)*. みんなの図書館. 2005, 344号, p.43-50.
- 5) 井上靖代. アメリカの図書館は、いま。(3) モンテソン・センター国際図書館員研修プログラム (2). みんなの図書館. 2006, 345号, p.40-49.
- 6) 庄ゆかり. イリノイ大学モートンソン・センター Fall 2006 Associates Program 参加報告. 大学図書館研究. 2007, no.80, p.108-120.
- 7) 高井響. “2006年度海外派遣研修報告書”. (online), http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2006.pdf, (accessed 2009-02-07).
- 8) 伊藤秀弥. “2007年度海外派遣研修報告書”. (online), http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2007.pdf, (accessed 2009-02-07).

< 2009.2.10 受理 おおつかしの 大阪大学附属図書館生命科学分館図書職員 >

OTSUKA Shino

A Report of the Fall 2007 Associates Program by Mortenson Center for International Library Programs, University of Illinois at Urbana-Champaign

Abstract: This paper is a report of the author's experiences participating in the 2007 Associates Program held by the Mortenson Center for International Library Programs and an introduction to some of the activities of academic libraries in the United States. The program combined visits to various libraries, lectures on current trends and issues, and local activities. Furthermore, since participants came from around the world they were able to connect with each other through a common bond of libraries. After experiencing the confidence and passion of American librarians, the author would like to see Japanese libraries become the kind of workplace where conversations center on how to improve user services.

Keywords: Japan Association of National University Libraries / overseas training project / University of Illinois / Mortenson Center / international library programs